

宇宙の易学 39 年

海野 和三郎 (天文学教室)

別に初めから志したわけではないが、この39年間、宇宙の易学だけをやってきたような気がしないでもない。とはいっても、易経も読んだことのない全くの自己流易学である。しかし、私の占は良く当るのである。(当りまえのこと

しか占はない。)私の自慢は、学問的業績において既に私を超えた弟子が沢山いることである。(占の成果!)しかも、その弟子にはまた弟子が居り、近頃では更にその弟子が居るといった時代になってきたので、私自身は正にマルチ商

法の元締のような心境で居るのである。尤も、弟子といっても私が何か指導をしたようなことはまるでないか、たまには指導した場合でも役に立たないことしか教えなかったので、弟子といっても全く主観的なものにすぎない。同様に、趣味の碁においても、実力に関係なく天文流家元を名乗っているのである。

私の主観的占の一つに陽震学の爆発的發展がある。X線天文学の理論的基礎である降着円盤学と同程度のスピードで同程度の発展をするであろうことを占ったが、大体そのようになってきている。陽震学は太陽の振動（多数のモードがある）を観測して、太陽内部の構造と運動を知る学問分野で、地震学とのアナロジーでつけた名前である。近頃は、非常な勢で陽震学が星震学に発展しつつある。さらに、次の卦においては、非線形力学系の進化の概念は宇宙観を変えようとしている。

ところで、理学部の将来を占ってみるといささか心配な卦が出ている。それは総合大学院の問題である。国立大学共同利用機関（共同利用研）が博士課程の大学院を持つという総合大学院は、一流装置のある場所で大学院教育を行うという点で大変機能的にみえるが、教育というものの本来の姿を見失った危険な構想である。総合大学院が失敗におわるだけならまだしも、全国の大学の大学院教育に悪影響があるので気をつけないといけない。

生物は生まれてくるまでに、それまでの進化の過程を繰り返すといわれている。研究者の育成にもそれに似たところがある。外国で出来上って製品となった科学をただ受け売りするだけの時代は終わった。自ら独創する研究者を育てるには、特定分野に専門化された場で切り花的な教育を行ってできることではない。学問の発展は、その源流をなす三つ以上の分野が非線形力学的に相互作用して新たな階層構造をつくっていくことにあるので、独創的な研究者を育成す

るには源流となるいくつかの学問分野が共存している場で行なう必要がある。一旦成長してしまうと、人は環境に印加されて獲得した資質も本来自分が持っていたもののように思い込んでしまう。しかし、伝統の力は無視し難いことがわかるように、環境の影響は非常に大きい。共同利用研は単独ではよい大学院教育機関ではあり得ない。

一方、共同利用研は大学院生や若手研究者が大いに研究活動をするのできる場でなくてはならない。共同利用研の教官が大学の大学院併任教官となる制度は是非必要である。この制度により、大学院生は大学に所属し、安心して共同利用研で研究にはげむことができる。大学は共同利用研をまるごと利用し、共同利用研は大学をまるごと利用するのである。大学側も、大学院に関しては、学内のみならず共同利用研ともイコールフットイングの建前で開かれた大学になる必要がある。また、共同利用研は、大学院生を受け入れると共に、充実したポストドクトラルフェローシップを持つ必要がある。一方、大学院生も5年の年限をまたずに、すぐれた研究をすれば学位を得ることが出来るようになっていく。この二つの制度がうまくかみ合えば、理想的な若手研究者の育成が可能である。

長らくお世話になりました。皆様の今後の健闘と理学部の繁栄をお祈りいたします。

